

(別紙)

「災害とともに生きるとは」

温暖化による地球規模の環境破壊をグテーレス国連事務総長は「地球温暖化から地球沸騰化へ」と警鐘を鳴らした。日本でも台風、大雨、地震、竜巻などによる想定を遥かに超える災害が全国で多発している。もはや新しいフェーズに突入したと言っても過言ではない。

自戒の念も込め、今まで自分が災害に遭遇しなかったのは単に運がよかっただけと、いい加減真剣に受け止める必要がある。

平時に自分にできることとして

- ・自宅における備蓄、食料、水、燃料、医療に必要な備品などの確認、準備
 - ・家族の安否確認方法、緊急連絡先の共有
 - ・行政機関に災害時要支援者登録
 - ・東京電力に停電時の発電機貸与申請
 - ・地域コミュニティにおける情報交換
- などが挙げられる、

しかしながら有時の際に避難となった場合、実際にどういった流れになるのか、連携について把握できていないのが実情である。

具体的には、車イスでの避難が困難なため、

- ・救助の人が何人で来てくれるのか。
- ・家からの脱出はストレッチャーか、担架か。
- ・車輦はどうするのか。
- ・介助による自宅内での垂直避難のケースもあり得るのか。
- ・避難所では他の人の迷惑にならずに吸引器や人工呼吸器の機能は維持できるのか。

日頃から地域社会、ご近所づきあいを通して災害時に手助けしていただけるようコミュニケーションを図ることは、確かに大切なことである。しかし、パニックになるような大規模な災害時にはご近所さんもまずは自分の身、家族の安全を優先するであろう。私が健常者であってもしようするに違いない。民間人なのだから自分の家族を犠牲にしてまで障害者を助けるなんてことはあってはならない。私には座して死を待つ覚悟もある。それは障害者だからとかではなく、人としての矜持だと思いたい。

話が脱線してしまったが、やはりいざという時に真っ先に頼るのはご近所さんであることに間違いはない。大規模な避難訓練は難しいかもしれないが、打ち合わせや顔合わせ、シミュレーションなどがあると安心感に繋がると思う。

先日保健所の方より台風の前にお電話をいただき、災害時の危機意識を啓発していただいたことは本当に有難かった。いわゆるエッセンシャルワーカーの方々も限られた原資、人員で対応していただいている。施策や支援に限界があることもまた事実である。

私はジョン・F・ケネディの言葉を思い出す。

「アメリカがあなたのために何をしてくれるかではなく、われわれと共に人類の自由のために何ができるかを問おう」。

健全者と障害者がより良い社会を創るために知恵を出し合うこと、そしてそういう空気感を醸成することが肝要であると思う。

AI、IoT、ビッグデータ、ドローン、ロボットなど最先端の技術を駆使した防災システムが次々と開発されている。いつの日か無人運転の空飛ぶ介護タクシーに乗って避難する日が来るかもしれない。激甚化し、頻発化する災害にどう立ち向かい、どう命を守るのか。恥ずかしいながら、まだまだ知識不足であり、食欲に吸収していかなければならないことも多いと痛感する。

微力ながら障害者の意見として、なにかの一助になればこの上ない幸せと感じる。

2023. 11 文責 阪爪進一朗